
笑うのは誰

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑うのは誰

【Nコード】

N4413S

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

＊「怖いもの見たさ」それはどこでも同じこと。深夜の廃病院というものはどうしてこう……誘うように見えるのだろう。＜ホラーコメディ＞

※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

◆揺れる鼓動

「な、なあ……やっぱ止めようぜ」

「今さら何言ってるんだよ」

男2人が声をひそめて足取り重く、白い建物内を歩いていく。その手には懐中電灯。共に黒髪、黒い瞳の30歳は越えていない。

ここはアメリカ合衆国、サウスカロライナ州の小さな街。南部地域にある州で、州都はコロンビア。

彼らはちよつとした仕事の帰り、自由行動の時間を利用して廃病院を訪れた。

懐中電灯を持ち前に立って歩いている男の名は八尾^{やお} 杜斗^{もりと}。185?の身長が威圧感を与える。その後ろからビクついてびたりとついてくるのが向井^{むかい} 時弥^{ときや}。170?と小柄ながら筋肉質だ。

壁は色とりどりのスプレーで殴り書きがされていて、床には剥がれ落ちた壁やら割れたガラスやらが散らばっている。

2人は気配を窺いながら真っ暗な廊下を懐中電灯かた手に進んでいく。

カチャリ……

「!？」

時弥は聞こえる音にビクリと強ぼり、杜斗の服をギュツと掴んだ。「なんだよっ」

「いっ今、後ろから音が……」

言われて杜斗は振り返る。しかし懐中電灯を回しても何も見えなかった。

「気のせいだろ」

「そ……そうかなあ」

開かれたドアを通り病室を覗いていく。1階……2階……3階……と、1つずつ階にある病室を見て回った。

それほど大きくは無い廃病院だが、ゆっくりした歩調にさすがに

時間がかかる。

「！ ここにも入るのか？」

「当り前だろ」

時弥は目の前の2枚扉に身震いした。左側は留め金がかなり緩んでいて傾いている。

大きな丸いライト、そこは手術室。外からも見える手術台が潰れた病院らしく2人を手招きしているようにぼんやりと白く浮いて見える。割れたガラスを踏みしめて1歩、体を滑り込ませた。

手術道具が乗せられた銀色のトレイ。緑色のシート……どれを見ても気持ちのいいもんじゃない。

「……」

時弥はゴクリと生唾を飲み込んだ。杜斗はじつくりと見られる機会を得たかのようにゆっくりと、さして大きくもない手術室を回る。

その時――

「！？」

「！ だからっなんだよ！」

突然、時弥が杜斗の右腕の服を掴んでゆすった。

「いっ……いいい、今っ外に何かっ」

「あん？」

杜斗は外に上半身を出し懐中電灯を照らす。

「何も無えじゃねえか」

「でっでも、見たんだ……」

視界の端に扉の前をスウーッと横切っていく影を……

彼はそれを必死に身振り手振りで示すが杜斗はそれに怪訝な表情を浮かべて信じようとはしない。

しかしすぐハッとして時弥に笑顔を向けた。

「お前、幽霊見たって事か？」

「ゆっ幽霊！？」

杜斗は残念な顔をして手術室から出て行く。慌てて時弥はそれを追いかけた。

「チェ……いいなあ」

「よくなんか無いよっ」

しばらく歩き回り小児病棟の前で足を止めた。

「ここにも入るの……?」

「当然だろ」

今まで見てきたベッドよりもひと回りほど小さなベットが並んでいる。数年前に流行ったであろうオモチャが時折、床に転がっている。

「……」

杜斗は、なんだかやりきれない気分になって今までより足早に通り抜けようとした。

《帰れ——》

「ひゃああ!?! 今の聞こえたっ!?!」

「何がっ? いきなり大声出すなよ」

耳元で叫ばれて杜斗は片手で耳を塞いだ。

「今、『帰れ』って聞こえた!」

「ああ? 俺には聞こえなかったぞ」

時弥は冷や汗が止まらなかった。そんな彼に杜斗は意地悪い言葉を発する。

「そういやさ、日本の幽霊って昔から足が消えてる事多いけど。外国の幽霊はしっかり足があって、走って追いかけてくるんだぜ」

「!?! やっやめてよね!」

「わはははは」

その後、ICUに踏み込む。特殊な機械が、使われる事もなく無惨に汚れてあちこちが欠けていた。

パソコンのディスプレイはひび割れて、椅子も座れるような状態じゃない。

数年前に潰れた病院の機械は、今では型落ちでしかない。
するとまた……

《立ち去れ——》

「!?!? いっ今の聞こえた?」

「何が?」

片眼を細め疑いの眼差しを時弥に向ける。お互いが疑心暗鬼になりかけていた。

時弥は、杜斗がわざと聞こえないフリをしているのではないだろうか。と……杜斗は、時弥が自分を怖がらせるために言っているのではないかと。と。

胸に複雑な思いを秘めたまま、2人は無言で歩き出した。

不気味に響く2人の足音。1人では帰れない時弥は仕方なく杜斗の後ろをトボトボとついていく。

「……」

地下へと続く階段に2人の足が止まる。壁には『靈安室』と英語で書かれた札。

時弥は反対するように杜斗の服をつまんでちよいちよいと引く。

当然、杜斗は降りるつもりで時弥に怒ったような目を向けた。

杜斗はここを最後に残しておいたのだ。楽しみは最後まで残しておく。踏み出そうとした杜斗の目の前に光が走った。

スターン! と小気味よい音が響く。

「……」

ゆっくりと左を向くと銀色のメスが壁に突き刺さっていた。

「——!?!?」

時弥はそれを見て声にならない叫びを上げた。そんな彼を鬱陶しそうに睨み静かにさせる。時弥は声を震わせ涙目になってか細く発した。

「こっ、これって、ポルターガイストなんじゃ!?!?」

「かもな」

さすがの杜斗もメスを見て驚きを隠せない。しかし、それでも階下に降りようと足を前に出す。

《立ち去れ——》

今度は杜斗の耳にもハッキリ聞こえた。体が強ばって動けない。

「……っ」

それでも杜斗は下に降りたい衝動にかられて足を動かした。

《それは勇気とは言わん》

「ひっ!?!」

すぐ近くで聞こえて時弥は引き気味に声を上げる。

「かつ、帰ろうよ……!」

「いや……今のは」

杜斗は険しい目をして後ろを振り返った。

◆幽霊たちの密会

「わあああ!？」

叫んだ時弥ときやの口をその影は駆け寄って塞いだ。

「静かに」

「あんたがさっきからやってたのか」

杜斗もりとは怒りに燃えた瞳をその人物に向けた。その青年は薄く笑って少し見上げる。

「あれで帰ってくれていれば良かったのだがね」

「なんのつもりだ？」

「ど、どういう事？」

相手が幽霊ではないとようやく確認した時弥が小さく問いかけた。
「ここではなんだ。こちらへ」

青年は2人を促した。階段を上り屋上へと続く扉のドアノブに手をかける。外は半分、雲で隠れた月が空に浮かんでいた。

季節は夏、夜には肌寒い気温だ。湿度が低いせいもあり服装は半袖や長袖がバラバラに存在する国らしく、その青年は前開きの長袖シャツを羽織っていた。

「で、あんたは何？」

杜斗が睨みを利かせる。金色のショートヘア、鮮やかな緑の瞳。
25歳ほどと見受けられる。

「ベリルだ」

さして表情のない顔が杜斗を見上げた。こわごわだった時弥は相手が人間だと安心して明るく笑う。

「えと、俺は向井 時弥。こっちが八尾 杜斗」

気さくに紹介した時弥を杜斗はジロリと睨んだ。そのままベリルと名乗った青年に目を向ける。

「なんのつもりなんだ？ 俺たちを怖がらせて喜んでいたのか」

「そんな趣味はない」

しれっと応えた。そしてベリルは逆に質問を返してきた。

「お前たちこそ何故ここに入った」

「……」

杜斗はしばらく黙って青年のエメラルドの瞳を見つめる。

「肝試しか？ 不純だな」

「うるせえよ」

威圧的に発した杜斗にも青年はその表情を崩さない。しばらくの沈黙が続いたあとベリルがおもむろに発した。

「モリトと言ったか。いつ気が付いた？」

「あ？ あんたの声が聞こえた時だよ」

《立ち去れ——》

「日本語だったんでな」

「なるほど」

ベリルは小さく笑って杜斗の答えに感心した。

「あっ！ そういえば日本語だった」

今更、時弥は気が付いた。

「凡ミスか？」

「お前たちが日本語で話していたのでね」

英語にするか日本語にするかベリルは悩んだ末に日本語にした。

恐怖が言語の違いの違和感を隠すと思っていたが杜斗は思ったよりも冷静だったらしい。

「あ！ そういえば今も日本語……」

「遅えよ」

杜斗が呆れて溜息混じりに時弥を見つめる。時弥は照れたように頭をポリポリとかいた。

「で？」

杜斗が再度ベリルに聞き返した。

「なんであんな事したんだ？」

「……」

ベリルの瞳は複雑な色を見せる。

「ここで、なんかあるんだな？」

逃がさない。とでも言うように杜斗はベリルを見据えて問いかけた。そして安心させるように付け加える。

「俺たちは自衛隊員だ。役に立つと思うけどね」

言った彼にベリルは口の端をつりあげた。

「だろうね」

「！ 知ってたのか？」

軽く腕組みしていたベリルは2人から少し離れて下を見下ろして応える。

「辺りを窺うしぐさが兵士特有の動きだった」

それに今度は杜斗が感心した。

「それに気付いたあんたもその方面の人間だよな？」

「傭兵だよ」

「！ 傭兵？」

時弥は怪訝な表情を浮かべた。兵士からみれば傭兵などヤクザな職業だ。戦場でも兵士と傭兵の間には色々といざこざが絶えない。

とは言っても自衛隊自体には関係のない話だ。その話も共同演習で一緒になったアメリカ軍兵士から聞いたものである。

そう、彼らはアメリカ軍との共同演習でこの地に来ているのだ。

といっても公には出来ないもので表向きは『交換留学』みたいなもの。実際、軍事演習というよりも武器の講習が主だったものであった。

「で、ここに何がある？」

「取引に使われているらしい」

「！ 取引って、麻薬とかの？」

時弥の問いかけにベリルは目を細めて苦い顔をした。

「それならば私が出てくるまでもない」

ベリルの言葉に杜斗がピクリと反応した。

こいつ……それだけの自信があるって事か？ いや、実際に難易度の高い仕事回ってくるのかもしれない。

「麻薬じゃなかったらなんだっていうんだよ」

半ば挑発的に訊いてみた。ベリルは左手の人差し指を立てて2人に不敵な笑みを浮かべる。

「劣化ウラン」

「!？」

「ええっ!？」

ウラン濃縮の際に生成されウラン235の含有率が天然ウランを下回るウランのことを劣化ウランもしくは減損^{げんそん}ウランと呼ぶ。

「……そんなもんをこんな場所取引するってのか？」

馬鹿げてる! 杜斗は呆れて両手を広げ肩をすくめた。

「だから、調べに来たのだよ。事実なら阻止せねば」

「なんであんなんだ? 調査ならFBIでもCIAでもいいだろ」

「劣化ウランは放射能を含んでいる。私に要請するのは当然だろう」意味の解らない杜斗に向き直り言い聞かせるように発した。

「そういう事だ。肝試しは他でやってももらえないか」

「う、うん。そうだね。行こう杜斗」

「そうだな」

素直に言った杜斗に時弥は安心した……が「肝試しなんてやる場合じゃなかったって事か」

「え……?」

笑顔が固まる時弥。ベリルは彼の言葉に眉をひそめた。

「俺たちも協力する」

「ええっ!？」

予想通りの言葉にベリルは溜息を吐き出す。

杜斗の表情からして言ってもききそうにない。彼は諦めて杜斗に向き直った。

「いいだろう。だが、私の指示には従ってもらう」

「わかった」

「ほっホントにやるつもり!？」

時弥は当惑して両手を泳がせた。そんな彼を杜斗は鼻で笑う。

「こんなチャンス滅多に無いぜ」

「チャンスって！」

抗議しようとした時弥を無視しベリルに顔を向けた。

「地下に行くのを止めたよな。地下が取引場所なのか？」

彼はバカでも無い事に感心しながらベリルは小さく頷く。

「幽霊たちの集会場だ」

皮肉を込めた言葉に杜斗もニヤリと笑う。

しゃべり方はエラそうだが人当たりは良いじゃないか。杜斗はベリルを見てそう感じた。

◆自爆例

「あんた1人って事は相手は少数って事か？」

「大勢で取引するような場所でもない」

「見張りとかは？」

「倒して縛り上げてある」

ベリルの答に杜斗は小さく口笛を鳴らした。

「しかしよ……傭兵がこんな仕事すんのかよ」

もっともな意見にベリルはクスツと笑った。杜斗を一瞥し階下に降りていく。

「傭兵だけの仕事では収入はあまりない」

それに、ああ……と納得したような声を2人は上げた。

「！」

ラフな恰好をしているベリルの後ろ姿に杜斗はふと気付く。ぱつと見、解らないが……かなり武装してないか？ 普段からこうなら、ちよつと怖い人物かもしれない。

「ひっ」

「……」

相変わらず周りの音に怖がる時弥に杜斗は呆れて右手で顔を覆った。

「あのなあ……」

杜斗は情けないが励ましてやる事にした。

「幽霊よりも肉体を持つてる俺たちの方が強いんだよ。解ったか」

「そ、そうなの……？」

「この次元に存在してる俺たちは肉体のエネルギー持つてる分だけ強い」

「本当……？」

時弥はベリルに泣きそうな顔を向けた。ベリルは苦笑いを返し口を開く。

「そう云われているが、本当の事は解らないよ。ただ、相手に肉体が無いという部分では確かにこちらが有利な場合もあるかもしれん」
「そこは同意しときゃいいだろ」

のらりくらりとした返事しやがって……杜斗は少し苛ついた。無口なんだかお喋りなんだかわかんねえこいつ。

少しずつ静かに霊安室の階段に向かう3人。時弥は一番後ろでビクビクしながら杜斗の服の裾を掴んでついてくる。

扉の壊れた病室を通り過ぎる——そよ風がベッドに散らばっているガラスの破片にいたずらを仕掛けた……カチャアアア……ン……
「わあああああああ!？」

「うるせえよ!」

「黙らんかー!」

時弥の叫びと杜斗の大声についベリルも声を張り上げてしまった。

「……」

3人は同時に口を塞ぐ。しばらく顔を見あせて沈黙……杜斗は誤魔化すようにベリルを見て発した。

「武器、余分に持ってるんだろ？俺たちにも分けてくれよ」

「自衛隊員でも使用は許可されていないだろ」

的を射た返しにぐうの音も出ない。他国に在るとはいえ日本人で自衛隊員だ。銃を使用した事が知ればタダでは済まない。

「あんたが言わなきゃバレない」

「自信がない」

ニヤリと言い放ちながら腰からハンドガンを取り出した。

「SIG^{シグ}か」

よく手入れされているオートマチックを受け取り杜斗は眺めた。

SIGはスイス工業会社の略である。以前は鉄道会社の1部門だったが、現在は銃器部門の事業を売却している。

2人に銃を渡して再びなるべく音を立てずに進む。

「!」

ベリルは何か気付いて2人を制止した。

病室に入り廊下に目を向ける。いくつもの足音が耳に届いた。どうやら、先ほどの大声で侵入がバレてしまったようだ。

当然といえば当然か……ベリルは目を据わらせて小さく溜息を吐いた。

「どうすんだ？」

「……ふむ」

杜斗の問いかけにベリルは少し思案する。相手の数は大して多くはないはずだ。三方に別れたほうが効率がいいが……彼らの力が解らない。

「このまま進む」

言ってベリルは病室を出た。

「……」

杜斗はその姿に少しムツとした。

こいつ、俺たちの力を信用してないな。当り前といえば当り前か……初めて会った人間がどれだけの能力を持ってるかなんて解るハズがねえ。俺だってこいつの力は解んねえし。

自衛隊員はむやみに発砲しないように教育を受けている。日本人の気質からも気楽に引鉄ひきがねを引く事は無いだろう。

彼らの安全を考え銃を渡したがベリルはそれを少し願った。

「！」

「え？」

ベリルが突然、走り出した。そして暗闇で姿が見えなくなったあと――

「ぐえっ!？」

うめき声と共に大きなものが倒れる音がする。

時弥たちが恐る恐る近づくと、ベリルの足下に見知らぬ男が倒れていた。

「わっ誰？」

「敵に決まってんだろ」

気絶している男の顔に懷中電灯の灯りを当てて杜斗がつぶやくように発した。

「早業だな」

苦笑いを浮かべてベリルに目を向ける。ベリルはそれに先に進むようにあごで示した。

「銃は必要なさそうだ」

「え？」

ベリルは呆れたような表情を浮かべてる。

「情報と違うって事か？」

「うむ」

杜斗の問いかけに答え銃を返すように手を出す。
ハンドガン

「なんで解るんだよ」

銃を返しながら不満げに言った。

「さっきの男、銃を所持していない」

「そうなの？」

品物の重要度から考えて武装していない事はおかしい。

「アーミーナイフは所持していた」

「あいつだけが持ってたただけじゃないのか？」

「取引中としては不自然だ」

アメリカという国において一般人が銃を所持していてもおかしくない。かと言って全ての人間が持っているという訳でもない。

中には手に持った事すら無い者だっているのだ。

「他のやつが持ってたらどうすんだ」

「私が体を張って守ってやるよ」

そこまで言われると反論出来ない。

「……おい。どうする？」

青年が小さな声でつぶやく。夜だというのに野球帽を被りTシャツに短パン。

「やるしかねえだろ……」

もう1人の青年が答える。似合っているとは言い難いチノパンにぶかぶかのシャツ。

ここは廃病院の地下——霊安室で彼らは会話していた。周りには5人ほどの青年と少年たちが手に手に注射器を持っている。

「さあ、これからドラッグを打つぞ！」という時に声がして何人かが様子を見に行った。

しかし誰も戻ってこない。まさか外に警察がいて捕まったんじゃないだろうか……？ そんな恐怖が脳裏を過ぎった。こうなれば抵抗してでも逃げるしかない。

青年たちは決意した。

ここは劣化ウランの取引でも、麻薬の取引でもなく……ドラッグを打ちに来る青年たちのたむろ場所だったのだ。

青年たちはゆっくりとした足取りで上へ続く階段に向かった。

◆騒がしい霊

薄々、そうではないかと感じているベリルの足取りは自然と重くなる。

「……」

どうしてもっと調べてから依頼してこんのだ……深い溜息が漏れた。

「？」

何故、彼が溜息をついているのか2人には解らず首をかしげる。

「とりあえず……」

ベリルは今後の戦闘について指示をだす。

「私が倒した相手のトドメを頼む」

「と、トドメ……？」

「腹でもなんでも殴れて事だろ」

先ほどと違って、かなりサバサバした態度のベリルに杜斗もりともなんとなく解ってきた。

「相手が幽霊だったら殴れないよ」

時弥ときやの言葉に2人は顔を見合わせた。そして杜斗は溜息を吐きつつ時弥の肩にポンと手を置く。

「お前ね。そもそも幽霊だったら倒せないだろ」

「ああっ！？ そうだった！」

「……」

面白いな……とベリルは2人の掛け合いに呑気な思考を浮かべた。

「！」

ベリルはすぐに感じた敵意に反応する。その様子を見て2人にも緊張が走った。

「……2人」

ぼそりと言って駆け出したベリルのあとに2人も続く。

「わあっ!？」

突然、現れた影に少年2人は驚いて持っていたナイフを振り回すが、そんな慌てた状態では冷静な相手に敵うハズもなく。

「ぐえっ!」

「ぎゃっ!」

ナイフを持っていた手の手首を掴まれ勢いよく引き込まれて倒れ込んだ処に杜斗と時弥のエルボーが炸裂した。

「あ、ホントだ。英語だあ」

「こいつらは幽霊じゃねえだろ……」

立ち上がった時弥の呑気な声に杜斗はがっくりと肩を落とした。

ベリルは喉の奥から絞り出したような笑いをこぼした。

「……おい、今の叫び声」

「仲間がやられた？」

4人の青年たちは急いで駆け出した。こうなりや一気にやってやる!

「! 来るぞ、部屋へ」

ベリルは2人を左にある病室に促す。駆け込むとそこは大部屋だった。10ほどのベッドが並べられているが、とても寝たいと思える気分じゃない。

薄暗い室内——いくつもの足音がなだれ込んできた。

「やっちまえ!」

「ぶっ殺してやる!」

おおよそ綺麗とは言い難い英語が飛んでくる。

暗視スコップがあればなあ……杜斗と時弥は相手の足音と息づかいを探りながら動き回った。

「ぐほっ!？」

「うげっ!」

そんな中でも叫び声が聞こえてくる。こんな暗がりの中でも相手を的確に倒しているベリルに2人は感嘆した。

そうこうしているうちに新たに数人が部屋に入ってきたようだ。当然、杜斗たちの仲間であるハズがなく足音からして3人。よくもまあ揃いも揃ってこんな場所で何をやってるんだかと3人は呆れた。

刹那――

「うるさい！」

男の怒号が部屋に響く。

その声の大きさにそこにいた全員が一瞬、ピタリと動きを止める。

「！」

“ダン！”

逃げようとした1人の少年の目の前にベリルがナイフを投げた。

「ヒッ！？」

右にある壁に深々と突き刺さったスロ―イングナイフ（投げ用ナイフ）を少年は震えながら見つめる。

それに驚いた時弥と杜斗だったが、少年の足下の床が抜けている事に気が付いた。あのまま走っていたら確実に階下に落下していただろう。

「……」

少年は恐る恐るしゃがみ込んで階下を見下ろす。

「うわゝ危なかったね、君」

時弥は英語で少年に発した。階下にはガラスだけでなく文房具が散乱している。もし落ちていればそれらが突き刺さっていたかもしれない。

「……」

他の青年たちも毒気を抜かれたように立ちつくした。

「それで良い。大人しくしている」

「イテテテテ！」

ベリルはまだ抵抗しそうな青年を踏みつけて携帯を取り出し警察に連絡した。

数分後——いくつものパトランプが廃病院の前に駐まる。

ぞろぞろとパトカーに押し込められていく青年と少年たちを3人は見つめる。

「まったく……これでは全額をもらう訳にはいかな」

ベリルは肩をすくませてつぶやいた。依頼料がいくらかは知らないが「お気の毒様……」と杜斗と時弥は苦笑いを浮かべた。

「はて？」

ベリルが何かを思い出したようにぼそり。

「どうした？」

問いかけた杜斗を見ずに彼は眉をひそめて口を開いた。

「依頼してきたのは誰だったかな」

「え、忘れちゃったの？」

「ちゃんとした契約しなかったのか」

2人の言葉にベリルは考え込みながら応える。

「いつも深夜に来て玄関で会話をしていたのだ。まあ、今回は金を取るほどのものでもないから良いか」

言いながら遠ざかっていった。

「……」

時弥はその後ろ姿をじっと見つめてゆっくり杜斗に顔を向けた。

「ねえ……」

「あん？」

時弥の顔は半笑いで口元が微かに震えていた。

「もしかして……幽霊からの依頼だったんじゃない……」

「まっさかあゝ」

杜斗は「わははは」と笑って右手を大きく振る。

「だ……だって」

「んな訳ねえって。そんな事よりもよ」

杜斗は時弥にニツと笑うと褒めるような声を上げた。

「あそこで“うるさい！”ってよく怒鳴ったな。あれであいつら動けなくなっちまったぜ」

ちゃんと英語だったし。と、杜斗はケタケタと笑う。

「え……」

しかし、時弥は目を見開いて杜斗を凝視した。

「……あれ……杜斗が怒鳴ったんじゃないの？」

「え……」

2人は互いに顔を見合わせた。

「あいつが叫んだとか……」

「あの声は違うと思う」

呆然と立ちつくしている2人の前にピックアップトラックが止められる。運転席から顔を出したのはベリルだ。

「良ければ送っていくが」

「あ、ああ。頼むよ」

呆然としながらも杜斗たちは後部座席に滑り込んだ。

「これであの病院も静かになるだろう」

おもむろに発したベリルの後頭部を2人は視界全体で捉えていた。

「そうだね……」

「ああ……」

それからホテルの前まで送られ2人は無言で車から降りる。

「どうした？」

反応の薄い2人にベリルは首をかしげた。

「いや、別に何も……」

「送ってくれてありがとう」

「うむ」

ベリルはニコリと笑い、聞こえるか聞こえないかの声でぼそりと発した。

「お前たちを連れていくとうるさかったのだな」

「へ……」

「なんでもない。それじゃあ」

聞き返した時弥に笑顔で手を挙げて走り去る。

「今の……どういう意味なのかな」

「さ、さあな……」

次の日——そんな話をアメリカ軍の兵士にしてみた。

「ベリル？」

「知ってるのかい？」

時弥の問いかけに、その兵士はしばらく考え込んで口の端をつり上げた。

「あいつは今60歳くらいじゃなかったかな」

「……は？」

「ああ、なんでもない。今日、帰るんだろ？」

「うん」

「楽しかったよ。またな」

爽やかに笑いながら30代ほどの男は遠ざかっていった。

「うん……またね」

それに手を挙げて応えながら彼の言葉を反芻はんすうした。

「……60歳？」

って事は……もしかして！？ 時弥は真っ青になって一目散に杜斗のもとに駆け出した。

「は？ 60歳？」

「ジャックが言ってたんだよ！」

「バカ言え。どう見たって20代後半って感じだったじゃないか」
杜斗の言葉に時弥はガタガタと体を震わせてか細く発した。

「あの人も……死んでたんじゃ……」

「バツ！？ 怖い事言ってんじゃねえ！」

2人はなんだか背筋が寒くなった。

そして「もう絶対に肝試しなんかしない」と、誓ったのだった——

最後に笑ったのは誰……？

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4413s/>

笑うのは誰

2011年8月30日03時24分発行